

金剛杵（こんごうしよ） 1具

金銅独鈷杵（1口）・金銅三鈷杵（1口）・銅五鈷杵（1口）

（こんどうとっこしよ・こんどうさんこしよ・どうごこしよ）

指定理由

真言密教¹において、修法の道具として実際に用いていた金剛杵のうち、行者が自らの護身と修行を妨げる煩悩を砕き破るために手に持つ独鈷杵、三鈷杵、五鈷杵である。いずれも銅製、鑄造で、鑄出した後に蓮弁²や鬼目³などの細部⁴を鑿⁵により彫り出しており、特に独鈷杵と三鈷杵には鍍金⁶を施している。

金銅独鈷杵は、両端の鈷が長く伸び、先端が鋭く尖って、四面を刳⁷って匙面⁸をとる。また把部中央⁹の重脣¹⁰の鬼目を丸く大きく表し、八葉の素弁¹¹蓮弁を長く伸ばし強く反らせて、尖り気味に鎬¹²を立てて彫り出すこと、蓮弁を三条隆帯¹³で強く縛り大きくくびれることなど、いずれも古様な特徴をみることができる。蓮弁の蕊¹⁴はやや粗い短刻線で表現し、鬼目側にのみ頭を魚々子¹⁵鑿¹⁶で表している。11世紀後半から12世紀前半の間に製作されたと考えられる。

金銅三鈷杵は、鈷が中鈷と脇鈷¹⁷2本の計3本になるもので、脇鈷が強く張る一方で中鈷の先が太く鋭さを欠いており、独鈷杵に比べて新しい様相を示している。しかし単脣¹⁸の鬼目を大きく飛び出させ、蓮弁を二条隆帯で縛り強くくびれる点は、独鈷杵より古様な造作ともいえる。蓮弁は幅広く穏やかさをみせ、蕊¹⁹は表現しない。総体に古様と新様を併せ持った作品で、12世紀の製作と考えられる。

¹真言密教：空海を開祖とする真言宗による密教のこと。

²蓮弁：ハスの花のこと。また、その形。仏の台座や光背、装飾などに用いられる。

³鑿：工具の一種。木工用の鑿（のみ）に似たもので、金属の加工に用いられる鋼製の工具のこと。

⁴鍍金：材料の表面を薄い金属の皮膜でおおう金属表面処理法のこと。

⁵匙面：断面がさじのように丸くくぼんでいる面のこと。

⁶重脣：二重のこと。

⁷素弁：蓮華文のうち、その花卉が単純に一弁ずつ並び開いている弁のこと。また、その文様のこと。

⁸鎬：部材の上端を真ん中で高く両端へ低く山形に削ったようにした形のこと。

⁹蕊：雄しべと雌しべのこと。

¹⁰魚々子 鑿：金属面に切先の刃が輪状になったたがねで細粒の円形を密に陰刻して表す技法のこと。

¹¹単脣：一重のこと。

銅五鈷杵は、中鈷の周りに脇鈷4本を作り出したもので、三鈷杵よりも鈷張が弱くなり、やや新しい様相をみせる。ただ、重脛の鬼目はまだ大きく、鐺を立てた幅広の蓮弁の先を尖らすなど、古風を明瞭に残している。最も特徴的なのは、蓮弁を縛る二条隆帯に斜行条線を刻み^{よりひも}撚紐状¹²に表していることである。同様の隆帯をもつ五鈷杵は全国で数例知られ、様々な表現の蓮弁・鈷・鬼目と組み合う。その中で本五鈷杵は、蓮弁表現とその縛りの強さで類をみない古作であり、12世紀に製作年代は遡ると考えられる。なお前面に黒漆を塗っているが、鍍金痕跡は確認されず、元々鍍金は施していなかったと考えられる。

以上のように、3口の金剛杵はいずれも個々の造作は異なり、異なる時期に別個に製作されたものである。しかし、これら収める桐箱の蓋には、以下の注目すべき墨書がある。箱書によると、これらの金剛杵3口は、少なくとも中世・近世を通して、中興開山^{ごうりん}杲隣¹³附属の師資相承^{ししそうしょう}¹⁴法具として用いられてきたと考えられる。

愛知県内の密教寺院に伝来した金剛杵を含む密教法具の作例として、南知多町岩屋寺の金銅法具類（重要文化財、鎌倉時代前期）や知多市法海寺蔵の密教仏具（市指定文化財、鎌倉時代後期）が知られるが、本作はそれらよりも大幅に古く、とくに金銅独鈷杵は日本国内諸寺院に伝来する独鈷杵の中でも古作に属する仏教工芸の重要作例といえる。

¹²撚紐状：縄状のこと。

¹³杲隣：東大寺で三論宗・法相宗を学び、のち空海に師事して密教を学んだ。また、空海の没後、伊豆修善寺をひらいたとされる。

¹⁴師資相承：武芸や学問などの教えを師から弟子へと受け継ぐこと。または、受け継いでいくこと。

金銅独鈷杵



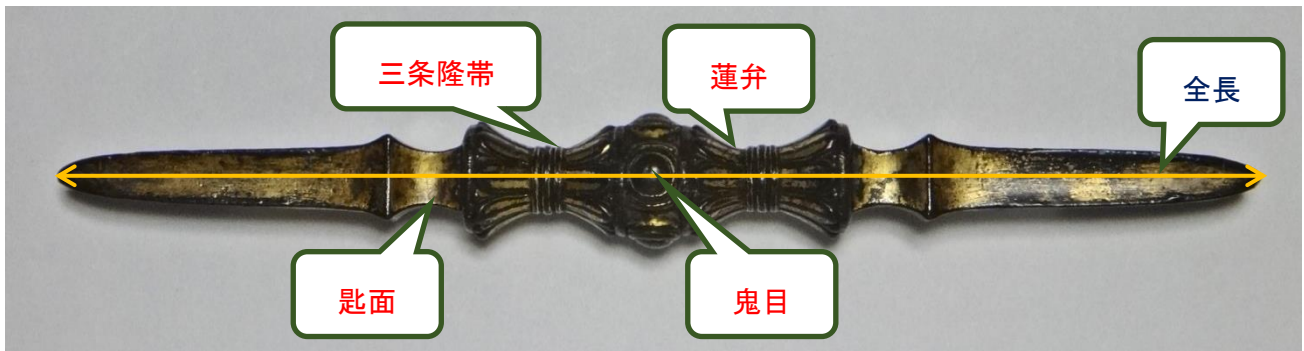
金銅三鈷杵



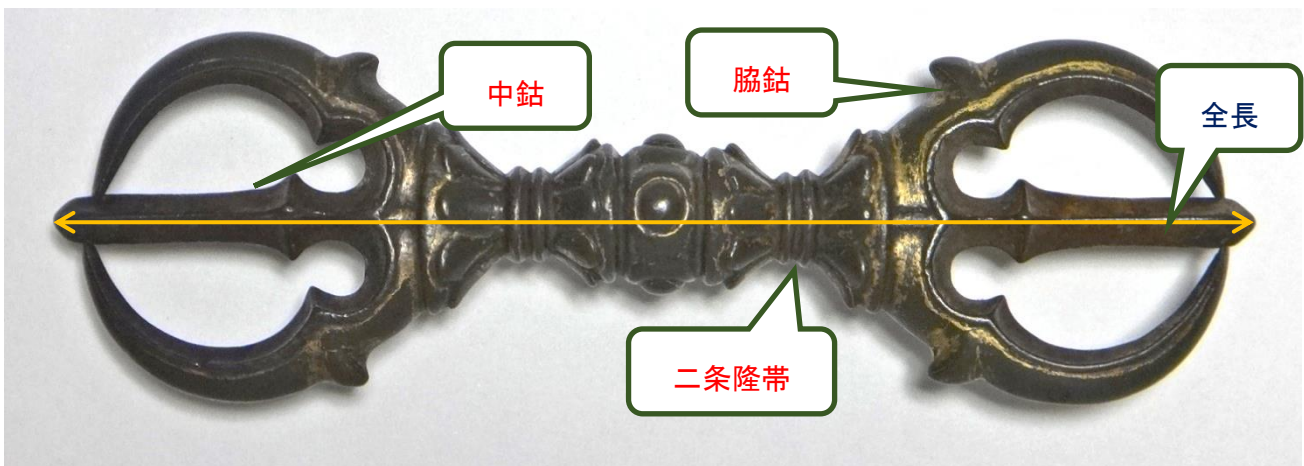
銅五鈷杵



(独鈷杵) 全長 20.7cm



(三鈷杵) 全長 18.0cm



(五鈷杵) 全長 16.5cm

